

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

一步、前へ

福岡県 大野城市立大野中学校 二学年

大塚 雄兵

山や川から大量の水が流れ出し、大きな家がいくつも流されていく……。そんな様子が映るテレビ画面を見て、僕は一言も話すことができなくなった。僕の家から約二十キロメートルの場所で、こんなことが起こっているのか、と衝撃を受けた。

数日前から雨の予報だった七月五日、九州北部を豪雨がおそった。その日、「雨が強くなってきた」と連絡を受けた父は被害が大きかった朝倉市に仕事で出かけた。僕は、すぐに帰ってくるだろう、雨もすぐにやむだろう、と思っていた。しかし、雨は降り続き、たくさんの人が亡くなった。父も数日間、帰ってくることはできなかった。電話をすることもできず、不安が募っていった。

そんなとき、母と姉と三人でテレビで被害を伝えるニュースを見ていたとき、父が画面の片すみに映った。すると姉は、「よかった。生きてた。」

と言っていた。僕も、言葉には出さなかったが、心の奥からうれしさがこみ上げてきた。母と姉が興奮して喜んでいたとき、画面は避難所が変わり、ある親子が僕の目にとまった。お母さんと男の子だった。二人は、うつむいたまま、うずくまっていた。とても、胸が苦しくなった。大切な人だけでなく、家や車、自分のふるさとがなくなっていく。住む場所もない、食べるものも満足にない、でも、買いに行くこともできない。あの人たちはこれから、どうやって生きていくのだろうか。そんなときに、明日この場所から一步踏み出すための力となるのが保険の姿なのではないだろうか。

数日後、父が帰ってきた。僕が保険の話をする、父はこんな話をしてくれた。

父はいつも、火事や自然災害の現場に行っている。身の危険を感じて逃げたくなかったこともあるそうだ。でも、母と姉と僕の顔を思い浮かべ、立ち止まりそうになっても、保険のことを考え、『自分に万が一のことがあっても、大丈夫だ』と思い、一歩前に進んでいるそうだ。理解できなかった。大切な人を考えると、生きて帰りたいのではないだろうか。

第55回中学生作文コンクール

保険の目的はそんなものではないはずだ、とそのときは思っていた。「危ない所に行く」人の背中をおしてほしくない。「明日、一歩踏み出す」人の背中をおしてほしい、と。

父は最後に、保険に入っておけば、僕たち姉弟が大学までいけるよ、と言った。そこでやっと気付いた。父は、自分に万が一のことが起こったときに、家族の背中をおしてほしい、と願ったのだ。

窓の外を眺めると、青い空が広がっていた。あの親子は、立ち上がり、一歩踏み出すことが、できたのだろうか。